

7 式年遷宮に内在する思考

式年遷宮の3大要素

- ① 社殿の新造
- ② 神宝の新調
- ③ 新宮への大神の遷幸

岡田米夫「神宮式年遷宮の本義」

遷宮といふのは、新しい宮を造り替へるだけが主目的なのでなく、そこには大神を遷し奉るためにといふ条件がついてゐるのであります。即ち新殿を用意するというのは「大神遷し」のためにこそ必要なのであると見るのを、正しい見方とするのであります。何故ならば、神遷しといふことは、神の照臨を仰ぐのが祭儀上の目的だからであります。

従って、①+②は③に集約される。

③を拝して神の示現を仰ぎおかげを蒙る

元禄2年(1689)9月13日、外宮の遷御を拝して

尊さに皆押しあひぬ御遷宮

松尾芭蕉

元禄2（1689）年、46歳の芭蕉は、約600里（2350キロ）にもおよぶ『おくのほそ道』の大旅行に挑みます。五カ月をかけて、東北、北陸をめぐる大垣に着くと、長旅の疲れを癒すことなく、舟で桑名へ、さらに伊勢へ向かいました。そして、9月13日内宮を参拝後、夜に外宮の遷御を拝します。当時は一般の人々も神さまがお遷りする儀式を見ようと神域につめかけ、大変な人出であったようです。

（略）しかし、『おくのほそ道』には「遷宮を拝まん」と舟にのるとわずかに書かれているだけです。芭蕉にとって伊勢は集大成の旅の終焉の地だったのか、それとも新たな旅の出発点になったのでしょうか。最後はこの一句で締めくくられています。

蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ

（蛤の蓋と身が分かれるように、親しい人々と別れ、二見に行く秋だ）

この句は、やはり西行が詠んだ「今ぞ知る二見の浦の蛤を貝合せとておほふなりけり」をふまえています。『おくのほそ道』執筆の際には、この「ゆく秋」に呼応して最初の句を「行春」に直したといわれるほどに、大事な一句だったのです。

芭蕉は伊勢を書かなかったことで、深い余韻とともに、もう一人の自分を旅の中に解き放ったのではないのでしょうか。現（うつ）し身と、もう一つの身。それが句に詠まれた「ふたみ」かもしれないと思ったのでした。



遷御(せんぎょ)の様

稲垣栄三「式年遷宮の建築的考察」

祭が繰返し行われる限り、過ぎ去ることのない起源の時がそのつど再現される。これこそこの制度を創始した人の求めたものである。（略）あらゆる時代に繰返された式年遷宮への参加は、その時代のもつ個有の時間からの脱出である。それはミルチュア・エリアーデが「永遠性に属する太初の時への回帰」とも「永遠の反復」とも呼んだ構造と同じ性格をもつものである。エリアーデが指摘するように、この行為は歴史に対する拒絶であり、創造的自由の拒否である。事実、式年遷宮を持続してきた各時代の造営の努力は、殿舎の形態のなかに何等創造の痕跡を残すことがない。造営の歴史は形として結晶するのではなく、専ら持続のための努力としてき虚空に消え去る。こうした持続への努力の繰返しという歴史のなかに、恐らく歴史を越えたある普遍的な文化の構造がみられると考えてよいであろう。

内在する2つの思考

1 常若の思考

常に瑞々しく清々しい生命力あふれる
状態を尊ぶ日本の伝統的思考

2 原点回帰の思考

遷御に感得される2000年前の
第11代垂仁(すいにん)天皇の皇女・倭姫命
(やまとひめのみこと)のご巡幸による天照大神
の伊勢鎮座(内宮の創祀)を再演し、時代を超え
て先人たちが伝えてきた神祭りの心と技、そして
その感激を20年に1度、共有するという思考

8 平成25年齋行の遷宮諸祭行事

33に及ぶ遷宮諸祭行事は造営祭と遷宮祭に区分される

造営祭は1番目の山口祭から24番目の後鎮祭まで

遷宮祭は25番目の御装束神宝読合から33番目の御神楽まで

| | |
|------|-------------------------|
| 18番目 | 御白石持行事(おしらいしもちぎょうじ) |
| 19番目 | 御戸祭(みとさい) |
| 20番目 | 御船代奉納式(みふなしろほうのうしき) |
| 21番目 | 洗清(あらいきよめ) |
| 22番目 | 心御柱奉建(しんのみはしらほうけん) |
| 23番目 | 杵築祭(こつきさい) |
| 24番目 | 後鎮祭(ごちんさい) |
| 25番目 | 御装束神宝読合(おしょうぞくしんぽうとくごう) |
| 26番目 | 川原大祓(かわらのおおはらい) |
| 27番目 | 御飾(おかざり) |
| 28番目 | 遷御(せんぎょ) |
| 29番目 | 大御饌(おおみけ) |
| 30番目 | 奉幣(ほうへい) |
| 31番目 | 古物渡(こもつわたし) |
| 32番目 | 御神楽御饌(みかぐらみけ) |
| 33番目 | 御神楽(みかぐら) |

御白石持行事

(おしらいしもちぎょうじ)

今回の遷宮では、平成25年(2013)7月26日より9月1日まで執り行われる。前回の参加者は約20万5000人であった。



お白石

「お白石持行事」は、一連の遷宮諸行事のひとつであり、新しい御正殿の敷地に敷き詰める「お白石」を奉獻する民俗行事。宮川より拾い集めた「お白石」を奉曳車・木そりに乗せ、沿道や川を練り進みます。神域に入ってから、一人ひとりが白布に「お白石」を包み、遷宮後は立ち入ることの出来ない新宮の御垣内、真新しい御正殿の近くまで進み、持参した「お白石」を奉獻する行事です。

「石英系白石」といわれるものです。宮川流域で見られる白石で、水晶のように少し透明感のある石肌を持つのが特徴です。石の大きさには大、中、小があります。



完成した正殿（しょうでん）が建つ御敷地（みしきち）に敷く白石を奉獻する行事。御木曳行事（おきひきぎょうじ）と同様に、旧神領の住民が揃いの法被（はっぴ）姿で「浜参宮（はまさんぐう）」の後、両宮の御敷地にお白石を奉獻します。お白石持の歴史は、550年以上前にさかのぼるとされています。古文書に、寛正三年（1462）、内宮の第四十回式年 遷宮から始まったとあります

御装束神宝読合 (おんしょうぞくしんぽうとくごう)

今回の当儀式斎行の日時

内宮 平成25年10月1日午前10時

外宮 平成25年10月4日午前10時



天皇陛下より大御神に献ぜられる 御装束神宝（おんしょうぞくしんぽう）の式目を 新宮（にいみや）の四丈殿（よじょうでん）において読み合わせる儀式です。御装束は大御神の御召し物や殿内の装飾の御料、神宝は威儀物で遷宮毎に古式通り新調し奉納されます。

川原大祓

(かわらおおはらい)

今回の当儀式齋行の日時

内宮 平成25年10月1日午後4時

外宮 平成25年10月4日午後4時





川原大祓(かわらおおはらい)

「仮御樋代(かりみひしろ)」・「仮御船代(かりみふなしろ)」や御装束神宝をはじめ、遷御(せんぎょ)に奉仕する神宮祭主(じんぐうさいしゅ)以下の奉仕員を「川原 祓所(はらいしょ)」で祓い清めます。

御神楽

(みかぐら)

今回の当祭斎行の日時

内宮 平成25年10月3日午後7時

外宮 平成25年10月6日午後7時



天皇陛下には 遷御（せんぎょ）の後、神宮に宮中の 楽師（がくし）を差し遣わされ 御神楽（みかぐら）および 秘曲（ひきょく）をご奉納になります。勅使・神宮・祭主以下が 四丈殿（よじょうでん）内の座に着き、庭燎（ていりょう）の明りがゆれる中、深夜まで御神楽が奏でられます。